

## 論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 歯 学 ）	氏名	伊達 智美
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 ・ 2 項該当		
論 文 題 目			
Stromal cell-derived factor-1 担持スキャホールドを用いた骨組織誘導の促進			
論文審査担当者			
主 査	教授	吉子 裕二	印
審査委員	教授	栗原 英見	
審査委員	教授	杉山 勝	
〔論文審査の要旨〕			
<p>現在、骨欠損を伴う口唇口蓋裂の治療には自家骨移植が一般的である。しかしながら、この治療法では、患者への侵襲が大きい上に、移植部位の形態維持が難しい。また、十分な強度をもつ新生骨が形成されないため、後の歯列矯正が難しいなどの問題を抱えている。</p> <p>このような問題を解決する新たな手段として、生体分解性スキャホールドを用いた組織工学による治療が注目されている。スキャホールドの力学的性質を制御することによって、移植体の形態維持が容易なことから、各種の口腔内組織の再生治療研究が盛んに行われている。口唇口蓋裂のような比較的大きな骨欠損の場合、スキャホールド内部での骨形成には長時間を要するため、骨組織の新生を促進する細胞、ならびに、細胞増殖・分化制御の可能な因子を併用する試みも数多くみられる。本研究では、骨芽細胞や間葉系幹細胞の誘引因子として知られる stromal cell-derived factor-1 (SDF-1) に注目した。この SDF-1 を多孔質性スキャホールド内に担持し、その局所濃度を高く維持することによって、内在性の骨形成細胞がスキャホールド内へ誘引され、スキャホールド内部における骨再生速度が向上するとの仮説を立てた。これを検証するため、スキャホールドに親和性を有するペプチドを利用して生体分解性スキャホールド-SDF-1 複合体を作製した。これをラット頭蓋骨骨欠損部に埋植して、SDF-1 の担持が骨形成速度に及ぼす影響を調べた。</p> <p>&lt;実験方法&gt; スキャホールド親和性 SDF-1 の作製を行った。塩基性アミノ酸 (K) および疎水性アミノ酸 (L) の連鎖が 5 回繰返されたペプチド KLKLLKLLKLL (KL5) を SDF-1</p>			

に連結した融合タンパク質 SDF-1-KL5 を大腸菌発現系によって合成した。精製物の分子サイズおよび純度は SDS-PAGE 法により分析し、二次構造に関する情報は円二色性分析 (CD 分析) により取得した。SDF-1-KL5 の機能評価として、Boyden chamber 法による細胞走化性試験を行った。細胞には、ヒト骨芽細胞株 (MG63) およびヒト不死化間葉系幹細胞株 (UE6E7T-3) を用いた。それらの細胞における SDF-1 レセプター (CXCR4) の発現は RT-PCR 法によって調べた。次に、スキャホールド-SDF-1-KL5 複合体の作製を行った。SDF-1-KL5 と生体分解性高分子 [L-乳酸-ε-カプロラクトン共重合体; P(LA/CA)] との親和性は表面プラズモン共鳴分析 (SPR 分析) により調べた。ソルトリーチング法によって作製された P(LA/CA) スポンジに SDF-1-KL5 溶液に浸透させ、内部に SDF-1-KL5 を担持した。担持量は BCA 法によって定量した。最後に、動物内骨再生試験を行った。ラットの頭蓋骨に直径 5 mm の骨欠損部を作製し、そこへ P(LA/CA) スポンジ-SDF-1-KL5 複合体を埋植した。比較のため、欠損部に何も埋植しないコントロール群、および、リン酸緩衝液適用群についても実験を行った。埋植後 0~28 週目にマイクロ CT 撮影を行い、骨欠損部の体積を測定した。さらに、埋植 28 週後に頭蓋骨を固定・脱灰し、凍結切片を作製した後、ヘマトキシリンエオジン染色を行い顕微鏡観察に供した。

<結果・考察>大腸菌内で発現させ、精製したタンパク質は、SDS-PAGE 分析において単一バンドを与え、その移動度は SDF-1-KL5 のアミノ酸配列から予測される移動度とよく一致した。また、同タンパク質の CD スペクトルは、天然型 SDF-1 のそれとよく一致した。以上の結果から、目的通りの SDF-1-KL5 を取得することができ、その SDF-1 領域の構造は、KL5 を連結しても損なわれないことが示唆された。また、細胞走化性試験の結果、作製した SDF-1-KL5 は間葉系幹細胞および骨芽細胞の走化性を亢進することがわかり、SDF-1 としての機能を備えていることが示された。さらに、SPR 分析によって、SDF-1-KL5 が P(LA/CA) 表面に吸着することが示された。その解離定数は  $9.8 \times 10^{-8}$  M であった。また、P(LA/CA) スポンジ内に SDF-1-KL5 溶液を浸透させた結果、 $0.16 \mu\text{g}/\text{cm}^2$  の表面密度 ( $6.1 \times 10^{-4}$  g/g sponge) で SDF-1-KL5 が担持された。動物実験において、骨欠損部の体積はラットの成長につれて増大したが、SDF-1-KL5 担持 P(LA/CA) スポンジ埋植群では、欠損部に何も埋植しないコントロール群、および、リン酸緩衝液適用群に比べて、欠損部体積の増大が有意に抑えられた。この結果は、骨芽細胞等の内在性骨形成細胞のスポンジ内部への浸潤が、SDF-1-KL5 の作用によって促進されたことを示唆する。組織切片の観察結果も、骨欠損部における骨様組織の形成が SDF-1-KL5 の担持によって促進されたことを支持した。

以上の結果から、Stromal cell-derived factor-1 を担持したスキャホールドを用いることにより、骨組織誘導の促進を期待できると考える。よって審査委員会委員全員は、本論文が著者に博士 (歯学) の学位を授与するに十分な価値あるものと認めた。